

特集

7月22日の皆既日食を観よう

作花一志（編集委員長）

世界天文年の最大の天文ショーである皆既日食まであと2ヶ月足らずである。前回わが国で見えた皆既日食は46年前、しかも早朝の知床半島だから、ほとんどの人は見ていない。次の皆既日食は26年後の2035年で、今年も千載一遇のチャンスだと多数の天文研究者、天文愛好家はトカラ列島に向かう。

かつて皆既日食は人々にとって驚異であり脅威であった。母なる恵みの太陽が消えてしまうのだから。わが国のアマテラス伝説をはじめ世界中にこのような伝説は多い。古代オリエントにあったメディアとリディアは交戦中に不意に起こった日食のため戦いをやめたそうで、これはタレスが予告していたという。古代中国の夏（実在は未確認）では日食予報をサボった義氏と和氏という天文官がクビ（罷免ではなく死刑）になったそうだ。天文官たるもの、命がけで計算して予報を出さねばならず、星空を楽しむ余裕はない。

19世紀以降、皆既日食の天体物理的な意義はコロナの観測であった。この時でないと見られないコロナの中で発見された未知の輝線は新元素ではなく高電離の鉄によるものだったということがわかった。また1919年の皆既日食（サロス周期の5回前）の時にエディントンにより光の曲がり観測され、一般相対論の予測が実証されたことも特筆すべき事件だ。筆者は皆既日食はコロナやプロミネンスの物理状態・加熱機構の研究のため欠かせない天文現象だと習った。しかし人工衛星が地球の外から太陽を観測し常時コロナが見える現在、わずか2~3分のためにわざわざ遠路皆既日食観測に出かける必要はあるのだろうか？専門家には怒られそうなこの素人質問に答えてくださったのは大阪のK氏（故人）だった。

「そりゃあんだ、皆既日食を見たことがないからや。いっぺん見たらやみつきにならなせ。今度一緒に行きましょ。」なるほど、これこそが天文屋の原点！

南の島へ行かなくても近畿で80%も欠ける大日食が見られる（表紙参照）。木漏れ日観察（下図：はまぎんこども宇宙科学館提供）、インターネットによる日食ライブも含め、それぞれの方法で一人でも多くの人に見てほしいものだ。ただし肉眼で直接見ることは、絶対に避けて日食メガネを使おう。次ページからの3つの記事および下記のウェブサイトを参照して準備し、当日の晴天を期待しよう。

<http://www.astronomy2009.jp/ja/project/eclipse/index.html>（世界天文年2009日本委員会）

<http://www.nao.ac.jp/phenomena/20090722/index.html>（国立天文台）

http://www.astroarts.co.jp/special/20090722solar_eclipse/index-j.shtml（アストロアーツ）

<http://www.eclipse2009.jp/index.html>（メディア・アイ・コーポレーション）

<http://astro.ysc.go.jp/090722SE.html>（はまぎんこども宇宙科学館）

<http://uchukan.satsumasendai.jp/event/news/2009eclipse/eclmenu.html>（せんだい宇宙館）

